

イザヤ書 53 : 1~12

ルカによる福音書 22 : 35~38

「罪人のひとり」

【前奏】 【招詞】 ヨブ記 19 : 25

【祈祷】 司式長老

【聖書】 イザヤ書 53 : 1~12、ルカによる福音書 22 : 35~38

【説教】 「罪人のひとり」

<サタンのふるい>

今日の箇所は、少し理解に苦しむところかも知れません。ここではイエスさまが、「剣を買いなさい」と言われる。そして使徒たちが、「剣なら二振りあります」と言うと、「それでよい」と言われます。

イエスさまが、使徒たちに「剣を持て」と命じられるとは、どういうことなのでしょう。か。「それでよい」と言われたのは、どういう意味なのでしょう。か。

今日のところを理解するために、わたしたちは、これまでの流れを知らなければなりません。今日の聖書箇所は、22章14節以下から始まった、イエスさまが「最後の晩餐」の席でお話しされたことの、最後の部分になります。

「最後の晩餐」でイエスさまは、これからご自分の身に起こる十字架の死の意味を、過越祭で屠られる小羊と重ねられました。つまり神の御子イエスさまは、神の民を救うために、犠牲にならなければならない。すべての人を救うために、死ななければならないのだ、ということです。そして、そのように教えられた後、その十字架の死を記念するために、救いの御業を覚えるために、今もわたしたち教会が守り続けている「聖餐」を制定されたのです。

しかし使徒たちは、イエスさまが仰っていること、これから成し遂げようとしておられることを、今一つよく分かっていません。ですから、このイエスさまの食卓で、十二人は誰が裏切り者だとか、誰が一番偉いかとか、そういった議論を始める始末でした。

そして、この直前の聖書箇所の31節以下のところで、イエスさまは、使徒たちが「サタンのふるい」にかけられること。つまり、試みにあって、その信仰が本物か、偽物かが明らかにされるだろう、と告げられたのです。

そこでイエスさまは、一番弟子のペトロに、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」と言われました。「信仰が無くならないように祈った」。それはつまり、ペトロの信仰が無くなりそうになる、ペトロがサタンのふるいにかけて、脱落してしまう、ということの意味しています。

ペトロは驚いたことでしょう。自分がイエスさまから離れるはずがない。信仰を失うはずがない。だから、必死に訴えたのです。33節「するとシモンは、『主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております』と言った」。

しかし、イエスさまはこう言われました。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

今日の箇所はこの続きです。つまり、使徒たちは、これからサタンのふるいにかける。これからイエスさまが引き渡され、十字架に架かって死なれる時に、彼らの信仰が試されることになる。本物の信仰か、偽物の信仰かが明らかになる。

しかし、使徒たちは、イエスさまの仰ることをまったく理解していないし、サタンにも自分の力で、自分の覚悟で、自分の信念で、打ち勝つことが出来ると信じているのです。

ペトロの「死んでもよいと覚悟しております」との言葉。これは、イエスさまを信じ、従い抜くことを。信仰の道を最期まで歩み通すことを、自分の力で、自分の強さで、やり遂げられると信じている者の言葉です。

しかし、信仰とは、自分の力でどうこうなるものではありません。信仰とは、わたしたちが神さまに依り頼むことです。すべてをお委ねして、神さまの御手に、御心に、御力に頼って、救っていただいて、導いていただいて、神さまの恵みの中を歩ませていただくことです。

イエスさまはかつて「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われました。子供のように。それは、一人前になれない、誰かに頼らなければ生きられない、弱くて、無力で、小さい者のことです。つまり、ただ神さまの恵みを受け取ることによってしか、神さまに与えられることによってしか、わたしたちは生きることが出来ない。救いに与ることが出来ない。信仰の道を歩み通すことは出来ないのです。

でも、それをまだ理解できず、自分の力で、自分の覚悟で、自分の強さで、信仰の道を歩み抜けると信じている使徒たちです。そんな彼らに対して、イエスさまは今日の御言葉を語られたのです。

< 剣を買いなさい >

35節で、イエスさまはかつて使徒たちを派遣された時のことを語られました。

こうあります。「それから、イエスは使徒たちに言われた。『財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあつたか。』彼らが、『いいえ、何もありませんでした』と」言った。

これはルカの9章の最初で、イエスさまが十二人に力と権能をお授けになって、神の国を宣べ伝え、病人を癒すために遣わされた時のことです。ここでイエスさまは。「旅に何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない」と言われました。

また、10章のはじめのところで、七十二人を任命して、ご自分が行くつもり町の町や村に二人ずつ派遣された、というところがありました。ここでも「財布も袋も履物も持って行くな」と言われました。

これは、自分の持ち物に、自分の力に、自分が手にしているものに、一切頼ってはならない。ただイエスさまの力に依り頼んで歩いて行きなさい、ということでした。

そして実際、「何か不足したものがあつたか」との質問に、使徒たちが「いいえ、何もありませんでした」と答えたように。彼らはイエスさまの力に支えられ、守られ、神さまの恵みに満たされて、使命を無事に果たして、喜んでイエスさまの許に帰ってきたのでした。

彼らはその時のことを覚えているのです。与えられた恵みを経験して、知っているのです。

しかし、使徒たちは今や、自分の力に依り頼み、自分の覚悟を信じて、このサタンのふるいを切り抜け、試みの中を歩み通そうとしているのです。

…だから、イエスさまは言われたのです。「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。言っておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」

これから、最大の試練が使徒たちを待ち受けています。師と仰ぎ、神の子、救い主と信じて従ってきたイエスさまが、罪人として扱われ、裁判にかけられ、十字架に架けられて殺されるのです。

このことは、必ず実現しなければならないことです。これは、すべての人を救う神さまのご計画であり、イスラエルの民に約束されてきたことだからです。

しかし、この救いの実現を前に、今、使徒たちは、神さまの力に頼らず、御言葉を信じず、自分の力に頼り、自分の思いに従おうとしています。

そのように歩もうとするのなら、使徒たちが自分の力に頼り、自分の力でサタンと戦い、自分の力で信仰を守ろうとするならば。彼らには、剣が必要となってしまうのです。武器を取って戦わなければならなくなってしまうのです。自分も相手も傷つける生き方しか出来なくなってしまうのです。

イエスさまがここで「財布、袋がある者は、それを持って行きなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」と言われたのは、すべて「剣を買いなさい」という言葉にかかっています。財布、袋がある者は、それで剣を買いなさい。服を売ってでも、剣を買いなさい、ということです。

しかしこれは、今のあなたがたの歩みを続けるなら、自分の力で、自分の覚悟で歩もうとするのなら、あなたがたは剣を持たざるを得なくなるだろう、ということです。あなたがたは、神に頼らず、自分に頼るなら、自分で自分を守るものを持たなければならなくなるだろう

う。そういう意味で、イエスさまは「剣を買いなさい」と仰ったのだと思います。

そうして剣を手にする使徒たちの姿こそ、神さまに頼ることをやめ、神さまの力を信じることをやめ、自分の弱さや無力さを知らずに、自分の力や覚悟を過信して、人を傷つけることでしか自分を守ることが出来ない。そんな、罪人の代表の姿、わたしたちの姿なのです。

自分の力で、自分の覚悟で生きるなら、わたしたちは、自分が手に出来るもの、力、能力、武器、お金、そういったものを持っていればいるほど、安心することが出来ます。

しかしその一方で、わたしたちの信頼は、見えない神さまの力や恵みよりも、自分が確かに自分の手で持っているように思えるものへと、重心が傾いていくのです。

そうして、自分の手に、自分の力に、自分の持っているものに、ますます依り頼むようになっていく。ますます神さまを信頼することから離れて行く。

そのようにしか生きられない、わたしたちなのです。神さまの御言葉に信頼し、すべてを委ねることが出来ず、手に剣を必要とするわたしたちなのです。

38 節はこう締めくくられています。「そこで彼らが、『主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります』と言うと、イエスは、『それでよい』と言われた。」

このイエスさまの「それでよい」という言葉は、OK という意味よりも、「それで十分だ」というニュアンスの言葉です。「剣なら二振り持っています」。「それで十分だ」。

自分の力で戦おうとする使徒たち。今、勇ましい気持ちで、剣をイエスさまにお見せする使徒たち。これからサタンのふるいにかけて、その力も覚悟も、あっけなく崩れていく使徒たち。「それでもう十分だ」。ここには、イエスさまの深い憐れみの眼差しが、深い悲しみの眼差しが、あるように思われます。

今のあなたたちは、その剣を持つしかない。しかし、無力だ。何本剣を持っていても、あなたたちは、サタンに打ち勝つことは出来ないのだ。あなたたちの覚悟は儂いものであり、自分に依り頼む信仰は、何も残らないのだ。二振りの剣。持っていても、いなくても、あなたたちは敗れ去るだろう。だから、「それで十分だ」。

<イエスさまの勝利>

しかし、もちろんイエスさまは、そんな使徒たちを見限られたのではありません。自分の力に依り頼もうとする使徒たち。その代表であるペトロに、前回のところでこう言われていたのを、わたしたちは改めて思い起こすのです。

31 節「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

イエスさまは、すべてをご存知の上で、わたしたちの信仰が無くならないように祈って下さっています。そして、必ず立ち直ることが出来ると、兄弟たちを力づけることが出来ると、イエスさまの恵みによって再び歩み出す姿をも語って下さいます。

わたしたちの信仰の歩みは、このイエスさまの祈りの中に置かれているのです。イエスさまの祈りの中で、わたしたちは、自分自身の罪の姿を明らかにされます。しかしまた、イエスさまの祈りによって、罪人である自分が、赦され、立たされ、歩まされていくことを、はっきりと示されるのです。

イエスさまがこう祈って下さるのは、イエスさまご自身が、わたしたちの罪を執り成し、わたしたちの罪を代わりに担って下さり、わたしたちに罪の赦しを与えて下さるからです。

37 節にはこうありました。「言うておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」

これは今日読まれた旧約聖書のイザヤ書 53 章からの引用です。イザヤ書で語られていたことが、イエスさまの十字架において、まことに実現するのです。

イザヤ書 53 : 11~12 節をもう一度お読みします。「彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。」

イエスさまの十字架は、まさにこう書かれていたことの実現です。すべての人の罪を担う僕とは、神の御子イエスさまのことです。罪のない神の御子が、罪人の一人に数えられ、多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成して下さるのです。

「その人は犯罪人の一人に数えられた」とあります。ルカ福音書の十字架の場面では、二人の犯罪者と共にイエスさまが十字架に架けられた、とありますが、これは単に、その犯罪者と横並びで処刑された、という意味ではないでしょう。

この「犯罪者」という言葉は、「無法者」、つまり、律法を持たない者、という意味です。律法とは、神さまに従うためのものであり、神さまと共に生きる道を示すものです。ですから、その律法を持たないとは、神さまと共に生きられない者、神さまに従えない者。つまり、神さまの力に頼ることをやめ、神さまの御心ではなく自分の心の従い、自分の力で歩もうとする使徒たちのことであり、またここにいるわたしたちのことなのです。

イエスさまは、そんな無法者のわたしたちと一緒になされた。悲惨な、罪に捕らわれた、剣を持つことを選ばざるを得ないような、わたしたち罪人と、同じところに立って下さったのです。いや、むしろ、そのわたしたちよりも、ずっと下に降って、底の底にまで降って、わたしたちが罪のために受けるべき苦しみを、裁きを、滅びを、すべてその身に引き受けて下さったのです。

そうして、罪の果てにも、滅びの果てにも、イエスさまがわたしたちと共にいて下さる。救いの道を拓いて下さる。深い罪の中から、神の国へ、神さまのご栄光に溢れるところへと、わたしたちを導いて下さるのです。

このイエスさまの執り成しに支えられて、祈りに守られて、わたしたちの信仰の歩みは成り立っています。ただこのイエスさまの許にしか、わたしたちの歩むべき道はありません。わたしたちの力も、覚悟も、剣も、何の役にも立ちません。そこには勝利もなければ、どのような平安も得られません。

イエスさまの十字架の下にのみ、罪の赦しも、命も、力も、サタンへの勝利も、あるのです。わたしたちが何も持っていなくても、わたしたちはイエスさまから、すべてをいただくことが出来るのです。

この方が共にいて下さるなら、わたしたちは剣を持たなくて良いのです。倒れても、サタンに敗れても、やがて立ち直ることが出来るのです。すべての罪は赦された、との慰めの御言葉を聞くことが出来るのです。

そして、神さまがわたしを愛し、赦し、救って下さることの平安の内に、ただ恵みによってすべてを満たされて、ひたすら神の国を見上げて歩いていくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

自分が無力であることを知らず、弱い者であることを知らず、あなたに頼ること、委ねること、恵みを求めることをしようとしなさい、罪深いわたしたちをお許し下さい。

わたしたちは何も持っていません。しかし、十字架の救い主、イエスさまにおいて、わたしたちはすべてを与えられています。わたしたちはサタンに打ち勝つこと、罪と死に打ち勝つことが出来ません。しかし、神の御子イエスさまの勝利に、共に与る者とされています。

イエスさまの執り成しによって、イエスさまの祈りによって、どうかわたしたちを神さまの恵みに生きる者として下さい。信仰の道を最後まで歩ませて下さい。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 使徒信条

【長老任職式】

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン